

(司会) 神崎 高明 (関西学院大学)

日本文化に属するものと英語文化に属するものがコミュニケーションをはかる場合、どのようなことが問題になるかを、外国人の書いた日本文学、翻訳、放送英語の通訳などの観点から洗い出し、その問題点に対応する解決策の可能性をさぐることを目指して 1999 年度のシンポジウム (関西学院大学にて開催) は企画された。講師は Mark Jewel (早稲田大学)、巻下吉夫 (関西学院大学)、小倉慶郎 (近畿大学)、三島篤志 (帝塚山学院大学) の 4 名の先生方をお願いした。

Jewel 講師のテーマは、"Cross-Cultural Communication from the Outside In: Three 'Blue-Eyed' Writers of Japanese"であり、デビッド・ゾペッティ『いちげんさん』(スバル文学賞受賞)、アレックス・カー『美しき日本の残像』(新潮文芸賞受賞)、リービ英雄『アイデンティティーズ』の三つの作品を取り上げ、外国人が「日本語で書く」ことの動機と意味について発表が行われた。

Jewel 講師の用意した資料を読んでもと、3 作家の作品の日本語は、日本人が書いた日本語と言ってもほぼ通じる。ただ、よく注意して読むと英語の構文の転移と思われる文もある。たとえば、「美しく住んでいる人」などの表現がそれである。このように外国人の作家だからこそ可能な新しい日本語の表現が作品のそこかしこにあり、それらは日本人の読者にとっては新鮮に響く。日本語の母語話者でないこれらの作家の作品が日本文学の中でどのような位置を占めていくのかということについては、はっきりとした予測を立てることは難しい。ただ、母語話者でなくとも文学史上高い評価を与えられている作家はいる。英文学でいえば、『闇の奥』を書いたジョセフ・コンラッドなどがそうである。彼はポーランド生まれでありながら多くの優れた英語の作品を残した。その意味では、上記の 3 作家も英文学におけるコンラッドのような位置を占める可能性もあるかもしれない。

巻下講師は「日本語に見られる始点的発想」と題し、日本語で書かれた小説をその英訳作品と比較しながら、日本語には始点を重視する表現が極めて多いことを、日英語の表現構造の差異の観点から実証的に示した。たとえば、「ドアの間からシャンソンが聞こえてくる(=From inside they could hear a French song.)」、「夢中で手足を動かす(=He began to move his arms and legs desperately.)」のように、始点で全体を代用する場合は日本語では多い。このような日英語の表現構造の差異に関する精緻な分析によって、今まで気づけなかった日英のコミュニケーション構造の差異が明らかになることを教えてくれる発表であった。

小倉講師と三島講師は「放送英語の通訳プロセス」について共同で発表を行った。小倉講師からは、放送通訳大国と言っていいほど様々な放送通訳が行われている日本の現状が紹介された。たとえば、セルビア人(the Serb)は、「ユーゴ政府」と訳すなど NHK BS での時差通訳の取り決めなどが具体的に説明された。三島講師からは CNN International と BBC World の放送通訳の比較がなされ、NHK BS(CNN Headline News)と CNN International で放送された同一ニュースの時差通訳と同時通訳の日本語訳の比較・検討がなされた。いずれの発表も現場で放送通訳に係わっている者でしか紹介できないような貴重な情報が含まれており、放送通訳の中に潜む異文化コミュニケーションの諸問題が明らかにされた。